

『源氏物語聞書〈覚勝院抄〉』における 〈三説〉をめぐる考察

上野 英子

元龜二年（一五七二）、物語本文と聞書注からなる『覚勝院抄』に新たに「三垂説」（三条西実澄説）という追加注が加わった。^{〔注1〕}正確にいえば、追加注が始まったようである。^{〔注2〕}本稿で言う「三垂説」とは、「三垂」「三垂説」といった肩付きのない尻付き等を有した注のことである。穂久邇文庫所蔵『覚勝院抄』（以後、穂久邇本と略）第一冊目によれば、物語本文と聞書注からなる所謂〈本行部分〉に対して、この「三垂説」の書き入れは別筆と判断できる。そして「三説」もまたこの「三垂説」と同筆である。つまり「三垂説」と「三説」とは、同一人物によって後から（すなわち『覚勝院抄』の基幹部分が出来た後に）書き加えられたものと解釈できるようである。

『覚勝院抄』には様々な肩付きをもつ書き入れがあり、なかには何の肩付も持たずに加えられた注も多いのだが、そのなかにあつて今回特に「三説」を採り上げるのは、「三垂説」「三説」ともに『覚勝院抄』諸本に共通してみられることから、『覚勝院抄』の成立にも深く関わってくる注記と思われたからである。「三垂説」が三条西実澄の説であ

る点については別稿で論じたので、本稿では残る「三説」について書写の様態を分析し、諸注との比較のなかからその位相を考察してみようと思う。

(一) 全体像

本稿でいう「三説」とは、「三説」という出典名を肩付きや尻付き、文章中にもつ注のことである。穂久邇本桐壺の場合、「三説」は元龜二年に追加された三条西実澄の注「三垂説」と同筆である。とはいうものの、「三説」も実澄の注と判断してよいのか、一概には決められない。なぜならもし同じ実澄の注であるなら、なぜ「三説」と出典名を変えているのか、不明だからである。それとも両者はそれぞれ別人の説で、ただそれらを書き入れた人物のみ共通しているだけなのか。はたまた同じ実澄説であつても受講の時期等が異なっているのか、本稿の狙いはこうした問題の解明にある。そのためにはまず『覚勝院抄』全体における「三説」の鳥瞰図を押さえる必要があるだろう。

いま穂久邇本をもとに、各巻に記された「三垂説」と「三説」を拾ってみると、その全体像は次頁に示す【表一】のようになる。総計をみるに、「三説」が四六例、「三垂説」が五三例である。書き入れ回数は「三垂説」が若干勝っているとはいうものの、近似しているとみてよいだろう。但し各巻ごとの分布状況を見ると、両説ともに五四帖にわたってまんべんなく書き入れられているわけではない。特定の巻に集中し、その総量も意外に少ない。そしてこうした傾向は「三垂説」よりも「三説」の方がより顕著で、集中してみられる巻は僅かに(桐壺・帚木・夕顔)である。ということとは「三説」は一部の巻々についてのみ、なされたということになる。また「三垂説」があつて「三説」の無い巻(葵・賢木・少女・柏木・紅梅)はあつても、その逆は無い。ということとは「三説」は「三垂説」に連動してなされ

【表1】

巻名	三説	三亜	その他(参考例)
桐壺	10	19	うち「……三大実澄ノ説也」(35ウ)
箒木	15	5	他に「三(大)説也……」(71才)、「大」を傍書
空蟬	1	6	
夕顔	17	7	
葵	0	1	
賢木	0	1	うち「三亜実澄説也」(116才・付箋)
少女	0	1	
初音	0	0	他に「三 仁王経ニ……」(1才)
柏木	0	1	
紅梅	0	3	
竹河	3	9	
小計	46	53	

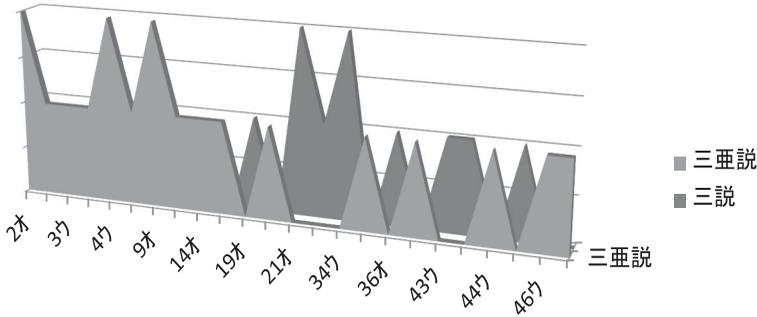
た注かという憶測も生じてくる。

また「三説」「三亜説」が各巻、どのあたりの丁から出現するかを調べてみると(詳細な数字は文末に【参考資料】として掲げておいた)、始めに登場するのは決まって「三亜説」で、「三説」は途中から出現し、以後「三亜説」と並行してみられるようである。例えば次頁の【表2】は、桐壺巻における「三説」と「三亜説」との出現状況をグラフ化したものである。横軸が出現した丁付で、縦軸が当該丁に出現した回数(〇～二回)、手前の線が「三亜説」、奥が「三説」である。これによれば二丁表から一八丁表までは「三亜説」のみ見られたが、一九丁表で「三説」が登場してからは「三亜説」「三説」ともに並行して見られる。そしておかかるとは、桐壺のみならず「三亜説」「三説」が登場する他の諸帖にも共通するようである。

では並行して登場するならば、例えば「三説」が「三亜説」を否定した例(あるいはその逆でもよいのだが)、「三説」が「三亜説」を補足した例などはあるかといえ、この両説がそうした形で交わることも無かつたようである。それ

「三垂説」「三説」出現状況(桐壺)

【表2】



が見られたのは穂久邇本系諸本にのみ加えられた青墨等による〈三大書入れ〉であり、こちらは「三垂説」や「三説」の注に抹消線を引いたところがある。だがこの注は実澄のことを「三光院」と呼んでいるため、実澄が没した天正七年（一五七九）以後の書き入れであつて、元龜二年（一五七二）当初のものではない。「三垂説」と「三説」に絞つて見る限り、この二種類の追加注が物語本文中の同一語句に対して重なつて加えられた形跡はないといえるようである。全体的な特徴を以上のように押さえた上で、次からは個々の注の内容を分析してみよう。

(二) 「三説」分析

次頁に掲げた【表3】は四六例に及ぶ「三説」を内容によつて分類したものである。列のAは実澄注あるいは三条西家の注と同趣と思われる注、列のBは他に例をみない独自の注と稿者が判断したものである。なお実澄注であることの根拠には、元龜元年に実澄がまとめた『山水』(以後〈山〉と略)や、慶長年間に中院通勝がまとめた『岷江入楚』所収の「箋」「箋聞」(以後〈箋〉〈箋聞〉と略)を参照した。

【表3】 覚勝院抄にみえる「三説」の分析

通巻号	巻名	丁付け	冒頭句	三説	A	B	備考
1	桐壺	19才	車トモ不書シテ	1		1	余情ある表現から題詠論へ。「南面」から北の方へ
2		21才	常ニ千秋万歳トハ申モノナレドモ	1	1		上東門院の長寿
3		21才	宮城野の御歌ハ	1		1	御製に対して宮中を宮城野に喩えた点を批判する
4		33才	事ノ外ト云詞アリ、同ト云々	1		1	「ことのほか」の語彙
5		34才	昔百濟國ヨリ	1		1	天智天皇の例を引く
6		34才	鴻廬館ト云ハ	1	1	1	鴻廬館の説明。足利義満の例を引く点が新説
7		36才	ヨロコビト句ヲ切テヨムハ	1		1	文章の区切りについて
8		43才	三説ミヅカラノ	1		1	「みづらゆひ」を「自ら結い」と誤解したか
9		44才	爰ノ御休所ト云ハ	1		1	「涙おとし」に新説提唱か
10		45才	元服スル人ノ髪	1		1	加冠の有職故実。類似するが「緋で櫛を包んで云々」は他に無い
11	帚木	12才	怪モツケノ怪也	1		1	実澄注は清濁だが、ここでは文脈解析
12		12才	カハラカハ	1	1		語意
13		13才	非三木ト云	1	1		有職。「従」を「亡」「傍」と表記、実澄か
14		14才	俗姓ト申方の遅レタル人ハ	1		1	「おどろくまじ」について文脈解説
15		16才	爰ハ我身ヲ女ニ	1	1		
16		17才	セバキ家ノ内ト	1	1		力点の置き方が『明星抄』とは違ってきたか
17		17才	ソヘニトハ	1	1		三条西家の独自注。公条が提唱し実澄も継承
18		19才	ピサウナキハ	1	1		語意
19		27才	三説ノ軽粧(ヒビラク)	1	1		語意
20		34才	アヒナダノミハ	1	1		箋・山に一致。但し弄花抄批判は覚のみ
21		36才	三説ひとひより親の	1	1		文脈解析。『明星抄』以来花説を批判、実澄も継承
22		43才	此わろかめりと云ハ	1	1		箋に一致
23		54才	三説ニハ歌などニハ畢竟	1	1		「わすかなるこしおれふみ」のくだり
24		78才	夏短夜ナレバ也	1	1		文脈解析
25		90才	大略ケレバト在之	1		1	異文「まどろまざりければ(り)」
26	空蟬	111才	蟬ノ■(モスケ)	1	1		蟬の語意
27		4才	三説河説ト違也	1	1		「便りモガナト思給テノ給也」
28		9才	三説夕顔ノ歌を	1	1		教訓
29		9才10才	三説心あての歌ヲ	1	1		「心あてに」は女房達が頭中将与誤解して詠じた
30		12才	三説■(アマヘ)	1		1	振り漢字
31		39才	三説大元の心ハ夕暮	1			「月にやすらひたる」、『明星抄』にも見える
32		43才	そなたの御覧したるハ	1			「光ありとみし夕顔の…」和歌の解釈。『明星抄』に一致か
33		43才	三説人の仕態(シワザ)	1	1		「海土の子なめり」「よしわれから」の文脈解析
34		47才	三説河ニ病ノ事ニ	1		1	「いとよはくて」文脈解析。河海を批判
35		夕顔	56才	みつはくみて	1		1
36	56才		三説従三位正子	1		1	正子は常子の誤りか
37	69才		三説我ヲ責テノ心ト云々、如何	1		1	三説を書写者が批判?
38	74才		三説前ニアル誰カレ時	1		1	前述の「心あてに」はやはり女房たちの歌と強調
39	82才		三説中陰注ニ悪人	1	1		「中道」天台と法相宗の解釈の相違
40	86才		三説此歌の心ハ	1	1		「蟬の羽も…」実澄の新説。山下水でも発表
41	86才		三説九月ノ中ヨリ十月ノ節	1		1	「冬たつ日」文脈解析
42	86才		三説ハ草子地ト也	1			『明星抄』にも草子地の指摘
43	86才		此詞ニテ猶夕顔事ト被知タルト也	1	1		夕顔のことと『山下水』でも披露
44	竹河		43才	■(三)説弄花ニ玉鬘ト	1		1
45		55才	三説イケル世ノ歌	1	1		和歌の解釈
46		58才	三説撰家ニモ殿上アル	1	1		有職故実
小 計				46	24	20	

さて前頁【表3】によれば、「三説」の半分以上はA、すなわち実澄注と重なっている。そうした例を幾つか紹介してみよう。

①三説 常二千秋万歳トハ申モノナレドモ 其モヨキ程ノ長生ガヨキ者也 上東門院ナドモ一段長生ニテマシクタルニ依テ 御孫ナドマデ多失ヒ申サレタル事也 ウキ目ヲ御らんジタルト也

(桐壺二丁オ・物語本文の頭注^(注4))

桐壺更衣の母御息所が軀負命婦に語った詞「いのちながさの、いとつらうおもふ給へしらるるに」のくだりである。従来の古注釈では『河海抄』が「莊子曰寿者多辱^(注5)」と指摘したのち、『弄花抄』『細流抄』『明星抄』に注は無く、『子壘抄』に至って再び「更衣の母の詞也 莊子曰寿者多辱^(注6)」と採り上げられてきた。こうした流れをうけて、実澄は〈山〉では「寿者多辱^(注7) 上東門院御事」(二四頁)として、莊子を引きつつも上東門院彰子の例を持ち出したようである。そして上東門院のことは〈箋〉も同様で、「上東門院御事をひかれたり 八八歳までおはしませしが 一条院后にて後一条院後朱雀院二代の国母にておはせしか共 いづれをもさきにたてさせ給りとみゆ^(注8)」(四八頁)とある。上東門院が長寿故に多くの身内に先立たれたことは既に『大鏡』でも指摘されていたことだが、その上東門院の例を母御息所の詞に引き当てたのは実澄が最初だろう。すると同じく上東門院を採り上げた『覚勝院抄』もまた実澄の注を引くものということになる。

②三説也 非三木と云 是ニ^(ママ)粉^(粉) アル事也 先官ヲ非三木と云也 大中納ニテモ 当官過テ先官ヲ云也 又散位トハ少心違歎云々 三位ニテ三木ニ不レ成ヲ 傍三位(傍)二位と云也 傍四位とハ不レ謂也

帚木の「非参議の四位ども」というくだりについた注である。かつて公条が『花鳥余情』を承けて「参議にもならで三位四位たる人か」(『明星抄』二四頁)と解釈していた注が、実澄の〈山〉になると「箋曰 政官之外ヲ云 或亡二位亡三位之類」(五二頁)と変わり、新に「亡二位」といった専門用語まで登場した。それは〈箋〉も同様で「太政官の外を非参議と云 亡二位亡三位の類也」(一〇七頁)とある。よって『覚勝院抄』の②もまた〈山〉〈箋〉同様、実澄注を引いたものと思われる。もつとも「亡三位」を「傍三位」と表記したり、「傍四位とハ不謂也」と断るなど、〈山〉〈箋〉にはない記述も混じってはいる。

③三説(ママアヒダノミカ)アヒダノミカ 八人ノ我ヲ思ニコソ思ハウズレ 人のおもはぬに此方より八何として思ハウズルゾト云事也
片思のやうなれ共 弄花ニ無_二申斐_一事トアル 不審云々 (帚木三四丁ウ・頭注)

穂久邇本では文末の「不審云々」が青墨による〈三大書き入れ〉によって抹消された。しかしこれは前述した如く、実澄死没後のしかも穂久邇本系諸本にのみ見える書き入れであるため、本稿では無視する。

③は品定めのため指喰いの女が語った「年月をかさねんあひなだのみはいとくるしくなむ」のくだりである。かつて実隆らが手がけた『弄花抄』では「かひなきたのみと云心也 又無愛云々」(二三頁)と解釈していた注であった。それが『明星抄』になると、『弄花抄』の前半部を継承して「かひなき類と云心なり あぢなき心也」(二三頁)と変わったのに対して、実澄の〈山〉になると、後半部分の「無愛」を継承して「人ノ無愛ヲ憑ムノ義也」と変わっていった。これは「人の愛せざるをたのむの義也」(一四〇頁)とある〈箋〉も同様である。すると『覚勝院抄』の「片思のやう」というとらえ方は、〈山〉〈箋〉の把え方と同趣とみてよいように思う。但し『覚勝院

抄』は〈山〉や〈箋〉には無かった『弄花抄』批判にまで踏み込んでいる。この相違は『覚勝院抄』における「三説」が書承ではなく講釈の間書だったためと思われる。聞手にむかって講師がどんな発言をしたのか、また聞手が講師のどんな発言を書きとどめたかに拠るものだろう。

以上、【表3】のA、すなわち実澄注と重なる「三説」の一端を紹介した。Aの二四例は「三説」が実澄の説である可能性を示唆したものとすることができようである。今度はB、すなわち独自注とみられる二一例から幾つか探り上げてみよう。

④三説 宮城野の御歌 惣別八名所ナレドモ 爰ニテハ宮中ノ事ト見ルヨキ也 宮中を讀教多アリ 是ハ御製ナ

レドモ ヨカラヌ御歌ト也 此ヤウニ宮中をサシテ宮城野トアルハ 主上ノ我御事也 先是ヨクモナシ 小菝

ト若宮^(皇親)ノ御事ヲアソバシタル カヤウニツゞキタルヲバ ホメヌ事也 恋路愁歎ノ上ナラデハ 秀逸ハ出

来セヌ物ナルトハ申セドモ 其モ大方ノ事にコソ 帝ノ御心マドヒナルニ依テ サモナキ事也 紫式部ガ読ト

モ五十四帖ヲ書上 秀逸ヲモヨマウズレドモ爰ヲ一ノ廉ヲ見セタル所に カヤウニアル事也 前ニアル更衣ノ

歌 限トテノ歌ニモ 帝ノ御^(マ)増^(贈) 答ノナキモ 御心ノ乱タルニ依ノ事ト見也 (桐壺二丁オ・付箋)

桐壺帝が亡き更衣の里に送った御製「宮城野の露ふき結ぶ風の音に小菝が本を思こそやれ」に対する注である。従来は『花鳥余情』が「宮城のは宮禁にたとふ 露ふきむすふは涙をいふ こはきかもとは若宮の御事なり」(八頁)とし、『明星抄』『孟津抄』なども『花鳥余情』を継承してきたのだが、『覚勝院抄』はこの御製を「ヨカラヌ御歌」と評した。宮中を宮城野に喩えたり、そこからの繋がりて若君を小菝に喩えたりしたのは、いくら御製でも不適切だと

いのだらう。だがかかる指摘は実澄の注釈書には掲載されない。(山)(箋)共に、この御製に対する注記自体が無
いからである。ただ『岷江入楚』所収「或説」(公条説)によれば、「御説(公条)時は 野分の時分 然も宮にておは
しませは宮木野と云とあそはす」(四七頁)とある。公条あたりから、なぜ宮中を「宮城野」などに喩えたのかという
疑問が出ていたろうことは窺われるのである。

⑤ 鴻廬館ト云ハ 鴻ハノノンド也 鴈ノ声ニ喩テ謂ル事也 鴈ノ声ホド遠ク聞ユル物ハナシ 唐書ヲ請取テ傳ユル
事也 通事也 此所ニ被_レ置テ都内ヘハ更ニ^(皇親)ヨセラレヌ事也 昔ハ百濟國ヨリ渡リ初タルト也 大略出家
也 僧尼渡ル也 寛平法皇ノ御遺誠ニテ 惣而近ヅケラレヌ事ナルヲ 鹿苑院殿御時 北山ノ金閣ヘ唐人ヲ聊
モ被_レ召タルト也 其毛路ニ悉ク随兵ヲ、カレテ 朱雀ヨリ北山マテ続タルト也 従_レ是都ヘモ入也 然ルニ衰
微スル歟ト也 玄蕃料トテ唐人ノマナヒヲ被_レ詠付タル事也 玄蕃ト書テ法師マラウト続也 是ヲ皆 ゲンバン
ト続云悪也 大。(元)。(ノ) 鴻廬館ハ東寺コレ東ノ口館也 西寺ト云在也 西ノ口館也 然_レヲ東ヲバ弘法
ヘ被_レ下タル也 其上後朱雀ニ被_レ定タル事也 三説ナリ
(桐壺三四丁ウ・付箋)

桐壺卷の鴻廬館の説明は『河海抄』『花鳥余情』で詳細な注が付けられ、実澄もそれらを書承している。その上で
(山)では更に「玄蕃寮也 七条朱雀也 四ツ塚ト云所ノ辺也」(二八頁)と加えたり、(箋)では「鴻廬の事 廬は声
也 伝ル心也 又鴻廬は異国の鳥也 扱異国の声を伝ルト云義也 又玄蕃寮を法師マラウトノツカサと云事ハ異国の
人は僧尼の始て来朝スル故に云也」(八七頁)と加えていた。これに対して『覚勝院抄』の場合はというところ、かかる先
行注を継承しながらも、私に施した傍線部のごとき全く独自の説明も加えているのである。これは寛平の御遺戒に反

して唐人を近づけた足利義満の例、おそらくは応永十一年（一四〇四）に始めた明国との勘合貿易の話を引きいたものと思われる。

⑥三説 昔百濟國ヨリ漢土ヲ可レ取トスル時 日本ヨリ天智天皇御自身進發有テ 海上ニ舟ヲ被レ浮テ ハタラヒ
ラレテ 漢土ヲスクハレタル也云々
(桐壺三四丁ウ・物語本文の頭注)

⑤と同様、鴻廬館に関する注である。⑤は付箋だったが、⑥は物語本文の頭部余白に書き入れられている。先行注で天智天皇の例（白村江の戦いのことか）を紹介したものは無いので独自注と処理した。とはいっても、注の内容は聊か不自然である。もしこれが白村江の戦いをさすなら、助けようとしたのは百濟で、戦ったのは唐・新羅の連合軍だったはずだが、事実認識が現代と随分変わっている。あるいはこれは「三説」の誤解か、覚勝院の誤聞であろうか。同様の誤りと思われる例がもうひとつある。

⑦三説 従三位正子ヲ（薨時）如此シタル 下心ニテ書ト也
(夕顔五六丁ウ・物語行間)

急逝した夕顔の遺体を席にくるむという「うはむしろにをしく、みて」の注である。ここの注は『河海抄』以来橘常子の例が引かれており、それは〈山〉〈箋〉も同様で、例えば〈山〉では「類従国史云 弘仁八年八月従三位橘常子薨―以席薨葬」（九九頁）とある。ことほどさように正解は橘常子であって、⑦にいう「正子」は「三説」の誤解か、覚勝院の誤聞かと疑われる。

【表3】によれば、このような誤りも含めて従来の説とは異なった独自の内容をもつ「三説」も二例ほどみえて

いる。とはいえ、これらは「三説」が実澄注であることを主張こそしないものの、否定するものでもない。なんとすれば、注釈というものは常に成長し、変化してゆくものだからである。ましてやそれが講釈ということであれば、相手に応じて例え話を加えたり、時に脱線してしまうこともあれば、反応をみて説明を省いたり、時にはうっかり踏み込んだ発言までしてしまうこともあるからである。

(三) 書写様式からみた「三説」

次に、先の【表3】では加えなかったものも含めて、気になる例を挙げておきたい。

⑧ 三 仁王経二時節に反逆ギヤクといへり 長閑なる時哀二寒く 又寒時分に暖クなるハわるき也 聖徳ミヤコの代なれ
ハ時節も折にあひて年たちかへるより寒気も名残なくおほゆる也 その心を仁王経にも則時節反逆ギヤクと云

(初音一丁オ・物語本文の行間)

⑧は初音巻の冒頭「年たちかへるあしたの空のけしき……」の行間に「三」という肩付きで加えられた注である。この肩付きでは「三説」とも「三重説」とも、またそれ以外の説とも解釈できるため、統計には加えなかった。尤も「年立かへる」の項の古注釈書を繕くに、公条までは「正月一日に成たれば冬の空に引替たるなり 元旦立春成へし」(『明星抄』初音)と簡潔だったのが、実澄になると「…凡時節ノ反逆ハ七難ノ一也 然ルヲ当時仁沢世蓋黎民撫育聖徳あまねき故ニ陰陽変理時候相調 秋ハ秋ノ如ク冬ハ冬ノ如ク春ハ春ノ如ク 時節ノケチメモ分明ニ一天泰平春也…」(『山』)と変わってくる。「時節反逆」を指摘した『覚勝院抄』の「三」が実澄説をひくことは確実なようである。だが

そうなるかと、今度はこれをなぜ「三垂説」と記さなかったかが問題になるろう。「三垂説」を略して「三」としたということがあるか。それならば「三垂説」を略して「三説」としたということも想定できないだろうか。

⑨花鳥に如_レ此尺シ給ヲ 是ハ余いき過タル注歟 只ならぬ瑞相ノ御座あると卜たる奇特ト可_レ然歟ノ由 三大実_{〰〰〰}
澄ノ説也云々
(桐壺三五ウ・聞書注文末と次の物語本文との行間)

少年源氏を占った高麗人の人相見が首をかしげたくだり、『覚勝院抄』では『花鳥余情』の説を引用しているが、⑨はその後ろに加えられた注である。私に引いた波線部に「三大実澄ノ説也云々」とあるように、この注は実澄の説だと明示している。すると『覚勝院抄』のなかで実澄は「三垂実澄」(賢木付箋)と呼ばれたり、⑨のように「三大実澄」(桐壺・行間注)と呼ばれたりしていたということである。賢木と桐壺は別筆なので、いまひとつ決め手に欠けるが、⑧と勘案するに、実澄がさまざまな呼ばれ方をしていたろうことは想像がつく。

そういう点では箒木の「三説^大」も興味深い。穂久邇本によれば、「三説」としたあとで、脇に「大」と記す。『覚勝院抄』の諸本のなかにはこれを「三大説」とする本もあるが、穂久邇本の場合は補入記号が無いので、傍書である可能性もある。ともあれ「三大説」であれば、この⑩も⑨と同様、実澄説ということになる。

⑩かのすけはいとよしありてと云ヲ 器用の事を源氏の給 伊与介ヨリハ紀伊守ハ若フヨケレバ うつせみの思はれんとの事と云々 三説也^大 如何 スケトアレバ伊与介サウナルヤウニ聞えたる也

(箒木七一オ・物語本文の頭注余白)

空蟬をめぐる伊予介・紀伊守父子の関係を源氏が推測する「かのすけはいとよしありてけしきばめるを」のくだり

である。「三説」(ないし「三大説」)によれば、(年寄りよりは若い方がいいよね)という解釈だったようだが、(山)
(箋)ともにこの項目に対する注釈が無いことから、実澄説の実際は不明である。だが『覚勝院抄』では、かかる
「三説」(「三大説」)を紹介しながらも、同時に「如何」として疑問を呈している点に注意したい。このことは『岷江
入楚』にも「かの介はいとよしありて 伊予介をほめて源の、給へる詞なり」(幕木一九二頁)とあるので、本文に
「すけ」とある以上、ここでの主語は伊予介以外にはあり得ず、伊予介をほめたくんだりと解釈した方がよいと判断し
たものと思われる。ともあれ「三説如何」とあることから、「三説」と覚勝院との関係は、師から弟子への一方的な
伝授という面ばかりではなかったようである。

まとめよう。『覚勝院抄』はその基底が完成した後、元龜二年から「三垂説」「三説」等が加えられた。うち「三垂
説」というのは三条西実澄の注である。本稿では残る「三説」をめぐって分析を重ねてきたわけだが、内容的に見て
半数超が実澄説と重なること、独自の注でもそれが実澄注でないことの証しとはならないこと、「三説」が「三垂説」
を否定したり補足したりすることは無いこと、実澄説は「三垂実澄」「三大実澄」「三」などさまざまな呼称が用いら
れていること、などから「三垂説」同様、実澄の説である可能性が高いように思われた。但し決定的な証拠を見つけ
ることができなかったから、あくまでも可能性が大であるというにすぎない。

とはいえ、ではなぜ「三垂」ならぬ「三説」という呼び方になったかという点については、講釈の時期が違ってい
たためと思われる。すなわち実澄は元龜三年(一五七三)閏一月六日に権大納言を辞し、翌年一月二日に本座を許
されている。大納言職を離れていたこの期間に、再度聴講した部分を「三説」として掲示していたのではないか、仮
説として提示しておきたい。

注(1) この問題については拙稿「『源氏物語聞書覚勝院抄』雑攷―周辺人物・書本・成立経緯をめぐる―」（平成二四年 豊島秀範編『文科省科学研究費一般研究（C）成果報告書』源氏物語のデータ化と新提言Ⅱ』所収）にて詳述した。

(2) 伊井春樹氏によれば、「当時の注釈書において、料簡の年号はその作業に着手した年月を表す場合が多い」（岩波書店『日本古典文学大事典』〈覚勝院抄〉項）とある。元亀二年から本書の執筆に取りかかったとする伊井氏の説は、元亀二年に追加注がなされたとする拙稿とは立場を異にするが、追加注が開始された年次としておきたい。

(3) 拙稿「『覚勝院抄』にみる三条西実澄の源氏学―「三垂説」の分析を中心に―」（日向一雅編『源氏物語注釈史の世界』平成二六年 青簡舎刊）

(4) 穂久邇本の翻刻は『源氏物語聞書 覚勝院抄』（平成元年 汲古書院）の影印によった。但し通行の字体に改め、私に空字を加え、かつ改行も直してある。以下同様。

(5) 引用は、玉上琢弥編『紫明抄 河海抄』（昭和四三年 角川書店）によった。以下同様。

(6) 引用は、野村精一編『源氏物語古注集成四〜六 孟津抄』（昭和五六〜六二年 桜楓社）によった。以下同様。

(7) 引用は、榎本正純編『源氏物語山下水の研究』（平成八年 和泉書院）によった。以下同様。

(8) 引用は、中田武司編『源氏物語古注集成一〜一五 岷江入楚』（昭和六〇年〜六二年 桜楓社）によった。以下同様。

(9) 引用は、中野幸一編『源氏物語古注釈叢刊四 明星抄 雨夜談抄 種玉編次抄』（昭和五五年 武蔵野書院）

によつた。以下同様。

(10) 引用は、伊井春樹編『源氏物語古注集成六 弄花抄』(昭和六〇年 桜楓社)によつた。以下同様。

(11) 引用は、中野幸一編『源氏物語古注釈叢刊二 花鳥余情 源氏和秘抄 源氏物語之内不審条々源語秘訣 口伝抄』(昭和五二年 武蔵野書院)によつた。以下同様。

(12) 穂久邇本賢木の付箋に次のようにある。

「天皇太后宮ハ当帝ノ祖母也 皇太后宮ハ当帝ノ母儀ヲ云 当(「后宮」△「脱落か」)帝ノ后ヲ云也 是ヲ三宮ト云也 中宮ハ皇后宮ヨリ又成アカリテノ事也 是ヲ加ヘテ四宮ト云也 サレドモ同シ后宮ヲニツ置事心得又事トテ 職原抄ニモ本朝ニ二宮ヲ並ベ置く事 理ニ不叶由ヲ被注タル也 然レドモ后宮ヨリ昇進シテ中宮ニ被成昇ヤウニ見ヘタル也 是ハ中古后宮方ニいづれをイツレトモ差別セラレニクキ時 兩人ノ后宮ヲナダメラレベキタメニ中宮ヲ被置タル歟ト云也 紅葉賀ニ弘徽殿太后ヲ引コシテ藤壺ヲ中宮ニ被置タルト書タレバ是ニテ分明ニ聞ヘタル事也 三垂実澄説也」

【参考資料】

通番号	巻名	丁付け	冒頭句	三垂説	三説	その他	備考
1		2才	大昔源氏物語ト	1			
2		2才	大般若ノサタ	1			「右族ノ奥義ヲ…」も一連の注とみる
3		3才	青表紙ノ■ハ	1			巻名の由来に、毛詩名篇之例を引くのは覚と箋のみ
4		3ウ	天子ハヒ一人ヲ	1			総領をめぐる公家と武家の相違に言及
5		4才	奥入ハ世尊寺	1			
6		4ウ	此物語ハ毛詩	1			雲隠を毛詩で説明したのは山下水と該書のみ
7		4ウ	尚書十三卷謹	1			
8		5才	伊勢集二書タル	1			
9		9才	うへ宮つかへ	1			「上宮仕え」の語彙。それまで注の項目に無し
10		9才	上ずめかしけれと	1			
11		10才	御願ト此物語ニハ	1			昨今の連歌事情
12		14才	まかでさせ給	1			「マカデ」読み方の指摘
13		18才	にはかに肌寒き	1			A清濁。B連歌事情
14		19才	車トモ不書シテ	1	1		「車」「南面」とともに語彙から発展
15	桐壺	20ウ	惣別此物語ハ	1			勅書から脇道
16		21才	常二千秋万歳		1		
17		21才	宮城野の御歌ハ	1	1		宮中を宮城野と喩えた点を批判する
18		33ウ	事ノ外ト云詞		1		「ことのほか」の語彙
19		34ウ	昔百濟國ヨリ		1		天智天皇の例を引く
20		34ウ	鴻廬館ト云ハ	1	1		鴻廬館の説明に、足利義満を引く
21		35ウ	花鳥に被此尺	1			「三垂美澄説」明星抄に掲載した説だが、覚では美澄説とする
22		36才	ヨロコビト句ヲ切		1		文章の区切りについて
23		38才	三垂ノ説親王	1			
24		43ウ	三説ミツカラノ		1		「みづらゆひ」を「自ら結い」と誤解
25		44才ウ	爰ノ御休所ト云ハ		1	1	「涙おとし」に新説提唱か
26		44ウ	此アゲヲリト	1			従来説は両説をあげたが、一方を否定した
27		45才	元服スル人ノ髪		1	1	加冠の有職故実
28		46ウ	紫ノ色ハ不可替	1			「てにをば」論へと展開
29	後見返し	三垂桐壺巻四度	1	1		「三垂、桐壺巻四度」聴講の回数か	
				19	10	0	

通番号	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備考
30		6ウ	自恣	1			「自恣」から仏教語「自恣日」へ脇道
31		9才	一つゆへづけて	1			
32		12才ウ	怪モツケノ怪也		1		清濁
33		12ウ	カハラカハ	1			語彙
34		13才	非三木ト云	1			有職。「従」を「亡」「傍」と表記、実澄か
35		14才	俗姓ト申方の		1		
36		16才	爰ハ我身ヲ女ニ	1			
37		17才	セバキ家ノ内ト	1			カ点の置き方が公条とは違ってきたか
38		17ウ	ソヘニトハ	1	1		三条西家の独自注。公条が提唱
39		19才	三垂説也但花ニ	1			「三垂説」がどれを指すのか、不審
40	篝火	19ウ	ピサウナキハ	1	1		語彙
41		27ウ	三説ノ軽粧ヒビラク		1		語彙
42		28ウ	うつほのとしかけ	1			文脈解析
43		34ウ	アヒナダノミハ	1	1		箋・山に一致。但し弄花抄批判は覚のみ
44		36ウ	三説ひとひより親の		1		文脈解析
45		43才	此わるかめりと云ハ	1			
46		54才	三説ニハ歌など	1	1		「わずかなるこしおれふみ」のくだり
47		71才	かのすけハいと		1	1	「(三)説也 如何…」。三説を書写者が批判?
48		78ウ	夏短夜ナレバと		1		文脈解析
49		90才	大略ケレノバト在之	1	1		異文「まどろまざりけれは(り)」
50	91ウ	篝火巻七度ニ三垂	1	1		「篝火巻七度ニ三垂」(朱)	
				5	15	1	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
51		92ウ	同三垂説以歌為巻名	1			並び
52		98オ	な■(ダイテ)コキ物	1			公案説とは違うが、既に山下水でも提唱済み
53		100ウ	愛をも三垂ハ鼻ノ	1			「はな」は鼻、漢の高祖は鼻高
54	空蟬	106オ	三垂説後二是ハ	1			のちに三大が抹消線をひく
55		106ウ	三垂説後二是ハ	1			4を抹消し、三大がここに書き入れた
56		111オ	蟬ノ■(モヌケ)		1		
57		113ウ	三垂説此歌伊勢か心	1			空蟬の歌は伊勢集からの引用
				6	1	0	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
58		1ウ	三垂説巻ノ名	1			公案は16歳説だが、逍遙院説として疑問を提示
59		1ウ	箒木巻の並也	1			「当流習は横堅に不立入」と主張。のちに三大が抹消線
60		3オ	三垂説此内ニ夕顔	1			覗く女房達の中に夕顔はいないと主張
61		3オ	三垂説雑部一	1			半部引き歌
62		4ウ	三説河説トハ遣也		1		「をちかた人」はこちらを覗く女達の影を指すと説く
63		9オ	三垂説ゲニヨニト云	1			東常縁の講釈模様、家の没落まで脱線
64		9ウ	三説夕顔ノ歌を		1		教訓
65		9ウ10オ	三説心あての歌ヲ		1		「心あてに」は女房達が頭中將と誤解して贈った
66		12オ	三説■(アマヘ)		1		振り漢字
67		38オ	三垂説優婆塞と	1			優婆塞の語彙は従来通り。付説が問題だが
68		38オ	三垂説金御嶽ト云	1			釈迦入滅〜世尊出現までの数字
69		39オ	三説大元の心ハ夕暮		1		実隆以来、「いざよふ月」は15夜月の有明と説く
70	夕顔	43オ	そなたの御覧したるハ		1		「光ありとみし夕顔の…」和歌の解釈
71		43ウ	三説人の仕態(シワザ)		1		「海土の子なめり」「よしわれから」の文脈解析
72		47オ	三説河二病ノ事ニ		1		「いとかよはくて」文脈解析。河海を批判
73		56オ	みつはくみて		1		「く」の清濁
74		56ウ	三説従三位正子		1		正子は常子の誤りか
75		69ウ	三説我ヲ責テノ心		1		「思し敷きおはします」の解説
76		74オ	三説前ニアル誰カレ時		1		前述の「心あてに」はやはり女房たちの歌
77		82ウ	三説中陰注ニ悪人		1		中陰
78		86オ	三説此歌の心ハ		1		「蟬の羽も…」実澄の新説。山下水でも披露
79		86オ	三説九月ノ中ヨリ		1		「冬たつ日」文脈解析
80		86ウ	三説ハ草子地ト也		1		草子地の指摘
81		86ウ	此詞ニテ猶夕顔事		1		夕顔のことと実澄新説。但し山下水で披露
				7	17	1	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
82	葵	58オ	アヒ名ダノミト云	1			「あひなだのみ」語彙
				1	0	0	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
83	賢木	116オ	天皇太后宮ハ	1			二后並立について、付箋注。「三垂実澄説」。
				1	0	0	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
84	少女	26オ	三垂相ハ良相トヨム	1			人名(藤原良相)の読み方。「三垂相」
				1	0	0	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
85	初音	1オ	三仁王経ニ時			三	「年たちかへる」
				0	0	1	

通番	巻名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備 考
86	柏木	34ウ	三垂説也惣別かノ字	1			清濁
				1	0	0	

九十七 『源氏物語聞書〈覚勝院抄〉』における〈三説〉をめぐる考察

通番	卷名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備考
87		15才	紅梅/事也三垂説	1			紅梅の呼称をめぐって
88	紅梅	15ウ	三垂説東宮女御ト	1			紅梅大臣の姫君たち
89		17ウ	晴マジロヒヲ鼻マルロヒト	1			説は一致するが、「花」を「鼻」と表記する
				3	0	0	

通番	卷名	丁数	冒頭句	三垂説	三説	その他	備考
90		21ウ	此似タメレトノ	1			開書注とは別の解釈を述べる
91		23ウ	ことのナサケ故殿ヲ	1			山下水でも公条説に異論を唱える
92		34才	ナラハサンカシト	1			本文「ならはむかし」の読み方
93		37才	同じうの詞也	1			話主
94		38ウ	此歌ウイギン也ト云テ	1			連歌論
95	竹河	41才	三垂説爰ヲ弄花ニ	1			
96		41ウ	此ハヤト云所ヲ三垂ハ	1			
97		42才	三垂説也爰マデガ草子地	1			
98		43才	■(三)説弄花ニ玉鬘ト		1		三説
99		55才	三説イケル世ノ歌		1		三説
100		58才	三説撰家ニモ殿上アル		1		三説
101		21ウ	玉鬘源氏トハ不余所	1			
				9	3	0	